

〔資料紹介〕

共栄圏財政金融調査協議会「山口（茂）委員報告」、昭和十七年八月十八日、大蔵省外資局

〔解題〕

ここに紹介するのは、山口茂博士が昭和十七年八月に大蔵省外資局で報告された「支那貨幣の性格と銀行券の問題」に関する報告である。当初、課せられた課題は「銀行券の発行制度」というものであったと本文中に記されているが、これを山口博士は、上記のように敢えて受け取ってこれを講述しておられる。その内容は、一面では、山口博士の銀行券論の応用的展開であるとともに、他面では、「支那貨幣」に関する一連の研究の嚆矢というべきものとなっている。特にそれらが、研究のごく初発の段階で、しかも口述のたちで行われているために、博士の考え方が、より分かりやすく、また率直かつ鮮明に述べられている。

ここに表現される山口博士の主張は、「ひらたくいって、戦時体制下においても、無理な経済統制は、いわゆる経済の自律性に反抗される結果を生み出し、自らの首をしめることになる」という警告であった。（西川義朗「山口先生と実証研究」後出）以下で紹介する本文をそのまま引用してみると、「円系通貨の流通経済的貨幣としての性格は、結論を先に申し上げると、流通経済的貨幣としては甚だしく微弱であると思はなければならないのであります。」何故なら、「円系通貨が流通経済的貨幣となるといふことは、それが所謂円域を構成して独立の経済圏を形作ることでありまして……然し

（昭和十七年）八月十八日
於 大蔵省外資局

山口委員報告

共栄圏財政金融調査協議会

山口委員報告

実はこちらから載きました問題が、中々三月や四月で出来ない問題ばかりでありましたので、丁度私の方で五、六人集まって研究してをりましたので、そちらの方に問題を含ませるやうな形で、私の方の立場から再編成して、そうしてずっとそれを研究して纏める。かういふことに相談が纏まりました。でありますから、今日こちらで私が報告致しますことは、直接こちらで載きました問題とは多少離れるかも知れませんが、その点を一つ御承知願ひたいと思ひます。それから中間報告でありますから、最後には手を加へなければならぬと思ひます。又今日此處で致しますのは、こちらから載きました問題としては、「銀行券の発行制度」かういふことになつてをります。それを令申上げたやうな意味合によりまして「支那貨幣の性格と銀行券の問題」かういふ題に載記したのであります。それからもう一言、御注意願ひたいことは、支那の金融或は銀行券といふ問題は兎に角表面的な問題であり、何処の國でも同じでありますけれども、金融貨幣といふやうな問題を形造る基礎はやはりその國の農工商業と密ひます。経済一般のあり方がどんな風になつてをるかといふやうな所まで掘下げて行かないと、実は金融通

ながら、こういうやうな条件は実際を見ると、実際とは全く違う訳であります。」つまるところ、「やり方がうまいまづいといふことではなしに、元々不可能のことをやらうといふことになっているのではないか。」こう鋭く指摘しているのであつて、これを「報告」された側の困惑ぶりが想像されるところである。さらに、通貨統一に關しては、末尾の箇所で、「支那の通貨統一といふやうなことも、事實は知りませんが、噂に聞いておりますので、さういふことをやると形式だけは纏まつてもさういふ感じをもちますので、さういふ見方を以つて問題を見てはまづいのではないかといふやうなことを実は申し上げたのであります。」としている。

銀行券に關する博士の所説をここで改めて紹介する必要はなからう。これに先立つこと三年余、昭和十四年に、博士は大著『流通經濟の貨幣的機構』（巖松堂）を公表しておられ、古典学派を理論的基礎とするその骨太の理論体系は、この種の問題を論じるに際して有効な座標軸を与えるものとしてよく知られている。

「支那貨幣」に關する問題整理は、最終的には、山口茂著『國際金融』（春秋社、現代商学全集第十巻、昭和三十二年）として結実し、特に同書の第二編「わが國貨幣の對外価値規準の変遷」において検討され理論的な整理がなされている。特に注意すべきは、それが単なる事情説明に終わるものでなく、博士の理論的座標軸の上に乗せて論じられている点である。

当時、山口博士は、現在の一橋大學經濟研究所の前身である東

亜經濟研究所の「中支經濟調査室」の研究活動を主宰しておられ、小泉明、天利良三、西川義朗といった方々とともに、軍配組合（正式には「中支那軍票交換用物資配給組合」、昭和十四年設立）資料の収集・整理・検討を指揮されていた。この間の状況は、山口茂先生追悼記念集『寸陰是惜八十年』（昭和五十年）所収の、西川義朗「山口先生と実証研究」や片野一郎「山口茂先生と私の「上海インフレーション會計」などの記述に詳しい。山口博士のこの方面の研究は例えば「中支物価の性格」（『一橋論叢』十三巻四号、昭和十九年四月）などとしても公表されている。

また、特に付記すれば、その後の軍票研究の集大成として、中村政則・高村直助・小林英夫編著『戦時華中の物資動員と軍票』（一九九四年、多賀出版）があり、その序章に研究史が集約されている。

散逸を恐れてここに資料として紹介させていただくものであるが、六十年余以前の歴史的資料であることから、表現などについて改めることをしなかった。大方のご海容をお願いしたい。

（鈴木芳徳）

山口委員報告

実はこちらから戴きました問題が、中々三月や四月で出来ない問題ばかりでありましたので、丁度私の方で五・六人集まって研究してをりましたので、そちらの方に問題を含ませるやうな形で、私の方の立場から再編成して、そうしてずっとそれを研究して纏める。かういふことに相談が纏まりました。でありますから、今日こちらで私が報告致しますことは、直接こちらで戴きました問題とは多少離れるかも知れません。その点を一つ御承知置き願ひたいと思ひます。それから中間報告でありますから、最後には手を加へなければならんと思ひます。又今日此処で致しますのは、こちらから戴きました問題としては、「銀行券の発行制度」かういふことになってをりますが、それを今申上げたやうな意味合によりまして「支那貨幣の性格と銀行券の問題」かういふ題に翻譯をしたのであります。それからもう一言、御注意戴きたいことは、支那の金融或は銀行券といふ問題は兎に角表面的な問題であり、何処の國でも同じでありますけれども、金融貨幣といふやうな問題を形造る基礎はやはりその國の農工商業と言ひますか、經濟一般のあり方がどんな風になってをるかといふやうな所まで掘下げて行かないと、実は金融通貨の問題に対したポイントに触れたやうな研究が出来ませんので、さういふ意味に於きまして実は私の方で引受けてをります東亜共栄圏の他の色々な部門についてその研究を聴いた上でこの銀行券或は金融通貨といふ問題を取上げることが一番適当なであります。で、さ

ういう意味では少し後からやるべきものが先に出て来たやうな形になってをるのでありますので、随つて後に他の方々の方々の報告を待つて、私の今日致しました中間報告を訂正しなければならん、かういふ風に思つてをります。さういふ意味では多少観測がましいことが余分に附け加はつて来る。實際に具体的な実體調査或は数字上の調査、さういふものの上に直接基礎を置くといふよりも、或る程度の調査の上に勘を働かして見透しをつける、さういふことになってをるわけであります。

それから今日の御報告の要点を先に申上げますが、一體通貨の問題、或は銀行券の問題といふのは兎に角一般的な問題として取扱はれる傾向が多い。これは御承知のやうに銀行券発行制度をどうするかといふやうな問題についての學說から見まして、やはり通貨主義理論といふやうなものは、これは具体的に或る通貨、個々の經濟の場に於て自ら發生した所の通貨を全體として如何に統制するか、どういふ風に纏めるかといふやうな立場から問題が取扱はれてをりますので、さういふ方向で取扱ふのが一般の方向であるわけであります。併しながら、さういふやうに如何に統制するか、どういふやうに纏めるかといふやうな問題が発生致しますのは、實際の經濟の個々の具体的な動きの中にさういふやうな統制さるべき客體と言ひますか、さういふものが發生してをる、その具体的な經濟の動きの方に問題を引戻して、通貨をもう一遍見直して見るといふことも一つの方向なであります。兎角全體として一般化するやうな、或は統一化するやうな、纏め上げるやうな方向といふのは通貨問題の傾

向でありますけれども、それをもう一遍具体的、個別的な方向に引戻して反省して見るといふことも一つの方向であります。さういふ意味に於て一般の取扱ひ方とは逆の方向に問題を取上げて行くといふことを示唆したのがこの報告であります。さういふ意味で、これが正しいか正しくないかといふよりも、通貨問題をさういふ方向で眺め返すといふことが必要なんではないか、さういふ意味合から問題を提出するといふやうな形で今日の御報告を致したいと思ひます。この報告の題は、先程申上げましたやうに、支那貨幣の性格と銀行券の問題、かういふことであります。

昔から支那の貨幣といふものは非常に特殊なもののやうに考へられてをり、又支那人が特別に銀を愛好するといふやうなことが言はれてをつたのでありますが、これは別に銀が好きとか嫌いとかいふ問題でなしに、支那の経済の大きさ、重さといふものに対して丁度銀の値打位のものが貨幣としてよかつたのではないか、かういふやうに考へてをるわけであります。ですから今でも支那人の貨幣観には、かういふやうな銀を特別に愛好するといふことが中核となつてゐると考へられてをるやうであります。或はもうそれは大体影を潜めてをるかも知れないと思ふのでありますが、かういふ觀察が正しい的を狙つてゐるかどうかといふことは結果に於て貨幣政策、或はそれをもつと一般的の形にした経済政策の妥当性を決めて行くといふことになりました、相当、実は重要な問題になるのであります。

一般に何が貨幣として用ひられるかといふ問題は、これは歴史的な問題であります。で、或る國民として銀を特別に愛好するといふ

ことは勿論あり得ることでありませけれども、一般的に見てその國の経済の重さ、或は大きさによつて定まる場合が実に多い。でありますから、経済の發達の程度が幼稚である場合には或は銅を用ひるとか鉄を用ひるといふやうなことがある。又稍々進歩した場合には銀を用ひる、或は進んだ場合には金を用ひる。経済の發達の度が低くて、生活程度がまだ低い水準にある間は高価な金銀を以てするよりも、値段の安い銅錢或は鉄錢―鉄錢は少いのでありますが、さういふ場合の方がよく釣合ふ。その國の経済生活の重み、或は大きさといふようなものによく釣合ふであらうし、又進歩した國では高い金貨幣を以てする方が便利であるわけであります。かういふような關係は歴史的な事実でありますけれども、この關係は理論上價格表示といふ名目的な問題に実は過ぎないのでありまして、歴史的にはさういふ事実になつてをりますけれども、実はどんなに進歩の程度が低くても、金を用ひることも、或は銅を用ひることもそれは出来るわけであります。随つて進歩の程度如何に拘らず、金銀銅、いづれも選び得る筈でありますけれども、先程申上げたやうに、経済生活の程度の如何が物価の國際的比較といふことに制せられまして、高い貨幣を便とし、或は高くない貨幣を用ひることが便である、かういふ場合が分れて来るわけであります。單純に國際的交通、乃至國際文化の轉換から見ると、世界全体が金貨國となる場合が無論一番單純であります。そうして都合がいゝわけであります。で、経済生活の遅れた國では、この場合國內的に見れば金が使はれたといふ場合には非常に不便になる場合が生ずる。それも事實

の問題であつて、理論的に言へば名目的の問題であります。ところがこの問題について理論的にはそれぞれの國に於て経済生活の基準或は価格表の單位を何処に定めるか。即ち円を基準にするか、或は錢を基準にするか、さういふ問題でありますけれども、その場合に経済生活の基準である所の貨幣單位が直接に担保たる素材を担つてをるか、貨幣が具体的にマネーである、實際に担保たる素材も担つてをる事實によつて金貨國か、銀貨國か、唯、円にするか錢とするかといふやうな高さの違いは何処でも理窟の上では宜しいのでございますけれども、實際に円としてしまったのではその國の生活程度が低いといふ場合には困難である、錢とした方が丁度いいといふ場合がある。ところが貨幣に素材がくつ付いて来る場合、実体貨幣である場合、かういふ場合には円にするか錢にするかといふやうな名称の問題でなくなつて、實際値段が高い金貨を以てするか、或は安い銅貨を以てするかといふことはその儘その國民の生活程度といふやうなものに丁度よく結び付かないと貝合が悪い。

いづれに致しましても、銀を愛好するとか、さういふことは大した問題ではありませんが、特に私達が支那の貨幣について注意をしなければならんといふ問題は、支那の貨幣が非常に短期的である。貨幣に短期的、長期的といふとおかしいのでありますが、併しながら、一般的な価値形態としての通貨は、発行者から見れば何時でもそれがどう使はれるか、貨幣資本として或は貨幣所得としてさういふ名前を負つて通貨一般である所の銀行券が動き出す場合に、その貨幣資本或は貨幣所得として、實際経済上の機能を果して行きます

場合に、支那の貨幣は短期的である。それは言葉を換へて言へば支那の通貨は短期的であるといふことが言ひ得られるんじゃないかと思ふのであります。この点はずつと後程までその問題がくつ付いて参るのでありますが、この支那の通貨の短期的な性格ということに對しては我々は常に反省して、支那の通貨構成或は経済構成といふものをやつて行かないと、誤るんじゃないか。かういふやうに考へられるのであります。一体よく最近支那の貨幣は物だ、或は商品だといふやうなことが言はれますが、何処の國に於いても、一体貨幣といふものを財貨一般から區別するといふやうなやり方は、恐らく全体として眺めた時に、学者がそれを如何に整理して把握しようかといふ時にやつたのがもとぢやないかと思ふのであります。ところが偶々、十九世紀の終り頃から二十世紀の初め、第一次ヨーロッパ大戦以前までの物を中心とする世界経済秩序が發展し、安定した當時、貨幣といふものが確固不動のものになつて、金本位さへ頼つてをればどこも安心してやつて行けるといふ國際的の均等が自動的に調節される、さういふやうに所謂貨幣経済といふもの、黄金の時代となつた。併しながらかういふ事實は偶々さういふ時代がさういふ方向にあつたといふ、極言するとそれだけの話でありまして、時代が變つてその國の生活といふやうなものが不安定になつて来れば、これはいつでも貨幣も物も大した區別がない。全体としてどうそれを纏めるかといふことについては別でありませうけれども、その経済の中で動く所の個々人の懷ろ勘定から考へて見ます時には、貨幣も物もそれ程大きな區別はない。さういふ風に、支那の場合には可

なり強い程度まで貨幣と物を区別するといふことから引戻される、いつでも実物で考へる、実体で考へるといふ所まで引戻される關係から、今申上げたやうに支那に於ては貨幣と物との區別が少いといふやうなことになるのではないかと思ふのであります。そのことは先程申上げた支那の貨幣は短期的な性質を持つてをるといふことと実は同じことなものでありまして、何時でも物に還元される立場にある。或はそれを今度は金融市場だけで見た場合には、何時でも短期の取引の流動性を豊富に持つてをる金としてでないと取扱はれない、さういふ形でだけ取扱はれるといふやうなことで丁度結び付くわけであります。で、さういふ物と金との區別が割合に薄いといふやうなことも後までの全体の報告の骨子をなすものなのであります。さういふ前置を致しまして、これから支那貨幣といふものの、性格をもう少し支那の實際ある経済といふものに即して分析し反省して見よう、かういふのであります。

支那に於ける貨幣の発行は計量貨幣であつて、馬蹄銀だけは別であります。他は概ね政府系の発行であつたのであります。馬蹄銀のみは御承知の通りに民間の機關としての銀炉ギンロによつて作成され、さうしてやはり同じ民間の機關である所の公估局トウキョクリンによつて確認されて印を押され、さうして流通してをったわけであります。だから計量貨幣である所の馬蹄銀だけは別でありますが、それ以外の貨幣は大概、政府系の発行になつてをります。即ち、銀元、銅錢、これは政府系によつて鑄造せられ、紙幣銀行券の発行も亦政府系によつて、或は政府系の発行に端緒を發して發行されてをったわけであり

ます。光緒十三年（西歷一八八七年）から銀元が發行されたといふことになつてをりますが、かういふ銀元或は銅錢、それから紙幣、銀行券、かういふ新式通貨の供給は総て政府系によつて行はれ、その動機は政府である。政府といつても無論、単一ではない。政府、総督、或は軍閥グンワ、さういふものの財政收入に關係する意味で發行されてをったわけであります。かういふ意味に於きましては支那の通貨の供給はヨーロッパの通貨とは非常に違つてをりまして、ヨーロッパの場合には所謂經濟的發行であるに拘らず、支那の場合には或る意味では財政的發行、かういふことが言ひ得られると思ひます。さうしてその発行は政府系發行ではありませんが、併しながら必ずしも一元的ではない。政府、総督、軍閥による多元的な發行であつたわけであります。併しながら一九三五年の幣制改革、即ち法幣制度の確立の場合には、硬貨の問題が解消してしまつて、紙幣問題に吸収され、さうして發行銀行の多数性はまだ少し残つてをりますけれども、全体として四ツの銀行から發行される、かういふ機構になつたのであります。かういふわけで流通經濟的でない關係から發行された通貨は支那社会に於て一体どんな風に受取られてをるか、政府財政の關係に於て發行せられました支那の通貨、銀票だけは別であります。それ以外のものは大体に於て政府系によつて發行せられてをる所の財政通貨であります。それが支那の社会に受取られる場合にはどういふ意味に於て受取られたであらうか、かういふ問題が起つて来るわけであります。

如何なる意味に於てかういふ通貨を受取るかといふに、支那の民

衆を農民と商民とに區別して考へることが便利であります。で、支那の人口の最大割合を占める所の農民の経済は、問題は無論ありませんが、一般的に見て甚だしく自給自足的である。さうしてその金銭収支を必要とする部分は全体から見ると極く僅かに過ぎない。で、金銭収支の発生は何処から起ったか。受取る方の農民社会から見ると、何処から一体起ったかと言ひますれば、僅かな文化物資の購入だとか、もう一つは租税の納付、この意味に於て支那通貨は為政者と民衆との上下の關係に於てその両者を結び付け、さうしてその両者の間の關係は單なる支払手段としてであり、この關係としては経済的關係は全く稀薄であつたと言はなければならないわけであります。ですから財政的な貨幣で、極く一部分が文化物資の購入のために、租税を支払ふために必要だ、かういふわけで、支払手段としての貨幣は政治と殆ど關係がない。自己の生活にのみ専念する民衆と國家、或は支配者、或は為政者、さういふやうなものを租税納付なる過程を通じて結合せしめていふことが、出来るわけであります。支那の國家的統一は民衆の生活と非常に薄い関連しか持たない。民衆の現実の生活面に於ては租税の賦課とその納付といふ關係によつて初めて上下の結び付きが達成せられてをったといふことが出来るわけがあります。この意味に於て支那貨幣は政治財政的關係として発行され、國家はそれによつて支払手段を供給し、その果す価値尺度の職能によつてわづかに人民の生活に籠^{カガ}を嵌^カめることが出来たわけであります。かういふ關係は農民以外の商民に同じく存在する。農民に対しても商民に対しても貨幣は一樣に社会の籠^{カガ}とし

て、枠としての作用をしてをったのではなからうかと思ふのであります。随ひまして、発行の当初から流通経済的な貨幣とは違ひまして、この關係に於ける支那貨幣は支払手段であり、又、価値尺度を示す支払手段ではありませんけれども、その価値尺度の変動、即ち貨幣価値の変動といふ問題を貨幣本質の内容として含むものではなかつたわけであります。政府が財政の必要から貨幣を発行する。それが民衆としては文化物資購入、或は租税の納入といふことのためにその貨幣が必要であるから重視せられるといふだけの關係で、その支払手段といふやうなものは勿論、価値尺度のファンクションを同時に尽してをるわけでありますけれども、その流通経済的な關係から発生する所の貨幣価値變動といふやうな問題は、発行する場合の財政的貨幣としての内容には本来予想されてをらなかつた問題であります。ですから発行者自身はそれ程さういふ問題に対して反省をしない。かういふことが一般的な傾向としては言へるのであるまいかと思ふのであります。租税の賦課とその納付、それで一つの回転をするわけでありますが、この一回転を含む短期的な貨幣として考へられて所謂、市場の面で、或は経済の実体の面で生産と物価の自動的調節、即ち物価が高くなれば生産が殖える、或は或る種の品物の価格が下れば、その生産が減るといふやうな、生産と物価の自動的調節、それが即ち流通経済的な貨幣の持つべき本来の作用であります。さういふ性格は予め予定せられたものではなかつたわけであります。この点に関しては、大ざっぱに言ふならば、日本の明治維新以来の貨幣といふものは大變これに近かつたのではないか、

かういふやうに感ぜられるわけであります。かういふ関係の下に於て発行せられました支那貨幣は、農商民によって受取られた場合、必ずしもその性格を変へない、依然として生産と物価との自動的調節といふ流通経済的循環と絶縁状態を続けてをるものとは言へないのであります。實際支那の民衆がさういふ貨幣を受取った場合に、それが先程申上げたやうな流通経済的貨幣或は物価と生産との自動的調節作用を持つやうな意味の貨幣、物と全く関係を絶つたものとしての貨幣としてどこまでも農商民がそれを受取り得るかといふと、実はそれは受取り得ない。どうしても民衆の間にその貨幣が入って来るといふ場合には、幾分なりとも流通経済的な関係としての貨幣たる性格を持つて来ないと、貨幣が流通されることが止まつてしまふといふことになるわけであります。無論この生産と物価との自動的調節といふやうなことは、その程度から言ひまして、非常にスムーズな関係、或る一つだけ打つと全体にそれがピンと響き渡るやうな関係として考へられる場合と、非常にその間に摩擦があつて、一方を叩いて見ても中々それが余所^{ヨソ}に波及しない、影響が波及しないといふ場合と非常に違ひがありますが、多少とも今申上げたやうな流通経済的な循環関係の中でファンクションを果す所の貨幣がないと、貨幣としては流通の結果がなくなるんじゃないか。この場合我々は地方に於ける農民社会と都市に於ける商民社会とを區別してどうしても観察しなければならぬわけです。

商民の方では打てば響くといふことになるのですが、農民の方では中々打っても響かないといふやうな、影響し合ふ点が非常に薄い

社会として我々は考へなければならぬ。さういふ意味に於て財政的貨幣が如何に受取られるかといふ面については、この商民と農民とを區別する必要があるんじゃないかと思ふのです。で、支那に於ける農村の生活は我が明治の初期のそれと同様に、自己生産の部分が相当に多い。金銭収支を必要とする部分は、租税上納のためと、程度の低い文化物資を得るために生産物を売却するわけであります。かういふ農村経済は地方の都市を中心として自給的或は交換的に行はれる。農村自体が相当自給する。併し余つた部分はそれを都市に送り出す。さうしてその都市に行つたものが段々と集まって大都市に集中して来る。農村で、金に換へられるべき生産物は段々と集まって地方の都市から大都会に流れる間に完全な商品としての意味を持つ。さうしてその間には問屋であるとか、或はその他の商人の手に入つて、さうして國內的な消費に向けられるために、支那の中でその商品が動いて行くでせうし、或は又、上海、天津等から外國に輸出せられるために港に出て行く。この場合地方農村に於ける貨幣は依然として單なる支拂手段として流通し、いまの商民の方はさういふわけでありましたが、地方の農民の方になつてくると、依然としてまだ支拂の手段として財政的貨幣の儘で流通し、流通経済的な意味は都市の商民の間に於ける程濃厚には出来て行かないやうであります。丁度我が国の徳川時代に於ける貨幣が、貨幣の実体価値については両替商のみが多く関心を持って、一般の庶民、殊に農民は実体がどの位になつてをるか、純分が悪い、目方が減つたといふことはそれ程反省する所がない。金銀錢の両替相場には変動があり

ましても、併しながらその変動は若し近代的な経済社会であるならば、その金銀銭の間の両替相場の変動性が直ぐ物価に影響すべきではありませんが、物価の方は余り変動しない。さうして貨幣が単に金、銀、銭、さういふものの間の需給関係を通してその相場が変動して来てをつた。さういふやうに全く近代的な流通経済関係的に全面的に波及するといふやうなことがなかったわけですが、それと非常に支那の場合には似てをるのではないかと思ふのであります。併しながら、支那農民の生活の傾向は、機構的には近代的な経済先進國に於ける流通経済のメカニズムといふものがはつきりは存在してをらなかったものでありますけれども、併しながら、彼等個々の生活が非常に苦しいために、一銭一厘を^{ユルガ}忽せにしないといふ、こすいやり方をしなければ暮して行けないといふために、彼等農民の生活は非常に営利的になって、商人的な抜目なさといふものが支拂手段としての貨幣の上に働いてゐるのであります。それは非常に営利的ではあります。併しながら、その営利とは、先程申上げたやうな近代的な流通経済の關係に於て見られるやうな意味の全体的な、合理的な営利性ではないわけであります。即ち価格と生産が自動的に調節するやうな循環作用を持つやうな意味の合理的な営利性ではなしに、自分と他人との間のマージンで以て暮して行くといふ建前から、一銭一厘も損しまいといふやうな意味の営利性で、都市の商民社会の場合と比べて見ますと、その点は余程違ふんぢやないかと思ふのであります。併しながら支那農民のかういふやうな営利性、即ちこすからい性質は、都市商民の営利性に連絡を持つのであ

ります。でありますから、支那農民の個々の生活に於ける営利性は先に述べたやうに価格と生産との自動的調節に全然關係がないものだと言ひ切つてしまふことは無論出来ない。唯その農民の営利性は、都市農民と關係少い地方では、流通経済のメカニズムと関連は少い。都市に近いやうな所では農民の営利性と言ふものも相當に訓練されて、全体的な合理性を多く加味してをる。かういふことが言へるのではないかと思ふのであります。

さういふわけで、農民社会が上から与へられた財政的貨幣を受取るといふ場合に、その地方の地位如何によつて或は又その風習、慣習によつて、或はその生産物がどういふ種類のものであるか、さういふ色々なことによつても、その全体的な合理性に、距離に於て違ひがあるのではないかと思ふのであります。

かういふ風に上から与へられた貨幣、即ち上下を政治的、社会的に結び付ける貨幣は、地方農民によつて受取られる場合に、先程述べたやうな意味を以て考へられるわけですが、都市商民に對してはどういふ關係で受取られてをるであらうか。租税上納が直接の貨幣需要の源泉であつたことは、支那の商民に於ても農民の場合と殆んど変りはない。かういふやうに見られるわけですが、併しながら商民の生活々動の営利性といふものは先程ちよつと申上げたやうに、流通経済のメカニズムの上に立つた全体的な合理性を持つものであります。支那の資本主義が商業資本主義と言はれ、支那の経済が商業経済であると言はれる所以の根底をなしてをるものはこの都市商民社会に於ける流通経済的なメカニズムの關係であり

ます。で、此処では或る一方で或る種の経済上の変化が起った場合には、それが滞りなくその商民社会の他の隅々まで波及する。さうして経済循環を長期的ならしむべき工業生産を殆んど支那の場合には持たないのでありますが、この都市商業経済亦或る程度自由に価格を支配し得る農民の経済を自己の犠牲に供する。商民社会の方が収めてしまった農民の生産物といふものは、所謂生産費を償う償はないといふ問題よりも、頭から価格を決めて、農民を自己の犠牲にすることが出来る。さういふ二つの点、即ち経済循環を長期的ならしめるやうな工業生産を持つていない、それから農民の経済を或る程度勝手に自己の犠牲に供することが出来るやうな地位を持つてをる商民、都市、さういふ都市の商業経済といふものは、今度は自分達の商業経済社会の中で合理的営利性を發揮して、さうしてその一番先端を行つてゐるものとして所謂、スベキュレーション、アービチュレーションの連続として上海を中心としての都市経済を形造つてをるのであります。さうしてかういふ都市商業経済は一方に於て貿易と資本の移動を通して外國市場に繋つてをります。他方奥地に對してはどうかと申しますと、半流通経済的な關係を通して地方農村経済に結びついて、さうして全体としての支那経済の性格としては、商業経済といふやうな性格として価値を現してをるわけでありまゝ。この場合の貨幣は單なる支拂手段ではなく、これを上から眺めて見ますならば、交換、媒介といふやうな貨幣の職能を果す経済通貨である。又これを受取る所の個々の商民から見ますならば、その貨幣は購買力として物が買へるのだ、或は又物を買うために蔵つ

て置くのだといふ意味で、その価値保蔵の手段として考へられるわけであります。購買力として觀念する、又価値保蔵の手段として觀念する。即ちこの意味に於て貨幣は近代的商業経済のメカニズムを支へ、又それによつて貨幣の性格が定められるべき關係を持つと言ひ得るのであります。但し支那に於ては都市商業と雖も同業的、同郷的な商慣習により、所謂、無差別法則が行はれ、一般市場は甚だしく曲められてをります。同業、同郷、或は縁故といったやうな關係からさういふものが曲められるものではありますけれども、兎に角、一錢一厘を忽せにしない商業活動によつて、全体としての商業経済の循環のメカニズムは十分に補はれる。さうして合理的営利性といふものは全体として十分に發揮せられてをるといふことが出来るのであります。

かういふやうな場に働く貨幣は、近代的经济先進国のそれと同様である商人個々の営利精神によつて尚ほ強められると思うのであります。併し支那社会の常に不安であるといふことによる長期的生産への投資の欠如、長期的生産の方面に貨幣が向かない。支那商民社会に於ける営利性といふものは極めて短期的なものである。即ち支那資本が生産資本に伸び得ない。商業資本たる範圍を脱し得ないことは全くそのためであります。この關係は、先程申し上げましたやうに、貨幣を短期的なものにならしめてをる。で、欧米の先進国の経済に於ても、長期投資、長期資本の形成の可能性は、短期化の可能性によつて支へられてをるのであります。即ち取引所その他の制度で、何時でも自分の持つてをる長期投資を他におつ被せて、自分

は逃れることが出来る。さういふ意味に於て取引所制度といふやうなものが活用さるべきであります。さういふ短期化の可能性が与へられることによって欧米先進國に於ては長期投資といふことは可能なんでありますが、支那の場合には、取引所その他の制度によって他に転売する制度は持つてをりますけれども、併しながらそれに基いて長期投資といふことが支那社会に於て行はれるかといふと、行はれてゐないのであります。それは支那社会が今まで長い間社会不安に襲はれてをった、さういふことから短期化の制度があつても長期投資が困難である。御承知のやうに、支那の場合の企業といふものは、無論、生産企業もありますけれども、その企業は日本、或はヨーロッパ的に考へるやうな意味の生産設備の資本として考へるのでなしに、いつでもさういふ生産設備は他に転売してしまふことが出来るやうな意味で、やはり資本として見るよりも、それを商品として観念する、危くなればいつでも売逃げて、自分は損しないといふことを考へるやうなやり方になつてをります。支那側の紡績会社がインフレーションによつて百倍以上の増資をこの一年以内までにやつてをります。さういふ事柄は取りも直さず支那の生産資本、生産設備といふものが、日本に於て、或は欧米に於て考へられるものと違つて、いつでも転売してしまふことの出来るやうな意味の商品として考へるといふことで、生産設備も物であると同時に、先程申上げたやうに貨幣も亦物であるといふやうに、総て商品化して考へるといふやうなことで、支那の場合には長期投資といふものが性格上困難なわけであります。このために、支那商民の間に於ける貨

幣は流通経済的貨幣であります、それは極めて短期的である。前に述べましたやうに常に物に転換する性質を有し、物と貨幣との區別すら殆んど困難である。我々が全体を整理して掴むために貨幣と財貨といふやうに言つてをりますが、勿論我々としても自分のポケットのことを考へれば、家を持たうが、有価證券を持たうが、現金を持たうが、それ程変りはない。

要するに財一般といふものの袋の中に抛り込んでしまふといふやうな見方が支那の商民の場合には非常に強いのであります。さういふわけで、貨幣も物の一形態に過ぎないといふやうに見られるわけであります。で、よく民族資本を動員するといふやうなこと、さうしてそれを生産資本たらしめようといふやうな政策も行はれ、努力されて来たやうであります、さういふことは今申上げたやうな意味から余程困難ではないかと思ふのであります。

かういふやうに見て参りますと、上から与へられた政治財政的な貨幣である所の支那貨幣は、発行に當つては支拂手段に過ぎないのであります、之を受取つた商民の間に於ては短期的な流通経済的貨幣として流通してをる。農民の場合に於ては依然として支拂手段的な貨幣として受取るのであります、都市商民、或は糧棧、買弁等の關係に於ても亦自己保存に専念するための営利的行動に経済的貨幣たる実質を加味してをるのであります。ですから支那貨幣の性格は上下の關係に於ける政治財政的貨幣と、これを受取る商民、農民から見て流通経済的貨幣とに一応分けて置いて、それを一緒にして考へるといふことを必要とする、かう思ふのであります。で、上

から与へられた支那の貨幣は支拂手段としての貨幣であつて、発行の動機と過程に於てその価値変動の問題も価値統制の問題も含まれてをらないし、又予想されてもいないのであります。貨幣は支拂手段であつて、それが社会民衆に受理せられるまでには、然しながら同時に購買力を持ち、価値保蔵の役目を自ら達成しなければ、これを下の方で受取つてくれないわけであります。その購買力の変動の問題は、かういふやうな貨幣の性質として本来、問題として持つていない。又その調整管理を予想しない。同時にその調整管理の手段をも備へてをらないわけであります。上から発行される場合にはいつでも軍閥、政府といったやうな者が自分の財政的な關係を通して都合のいゝようにやる、それがどういふやうに価値変動するだろうか、或は変動した場合にそれをどういふやうに仕向けて行くか、といふやうなことを本来予想していなかつたと言へるわけです。然しながら、実体貨幣である所の銀元、或は銅銭の場合には、その貨幣自体の中に統制作用を含んでをる実体貨幣でありますから、発行者の方は別にそんなことを考へなくても、貨幣自体の中にさういふ作用を含んでをる。数量もやたらに沢山出すといふわけには参りません。政府自身の発行動機が財政収入にあつたとしても、或る程度の管理が自らはれてをったわけであります。但しその作用は政府の意図に基く貨幣の劣悪化によって屢々無効となつたことがあります。が、大体それ程激しい状態にならないで済んだ。然しながら紙幣の間には調節機能を持たないために、政府、軍閥のために屢々悪性インフレーションを起したといふことは御承知の通りであります。か

ういふわけで、支那の貨幣制度に於ては政治財政的貨幣と流通経済的貨幣とは、その間に必ずしも連絡すべき機構は初めから持つていない。メタリックカレンシーの場合には別であります、さうでない紙幣の場合には、初めからさういふ機構を持つていないわけであります。今日に於ては所謂管理制通貨として考へられるべきものであつたかも知れないのでありますが、支那に於てかういふ名称を以ては決して安心し得る程度のものではなかつたわけであります。

で、一九三五年の法幣制度確立、即ち幣制改革は政治財政的貨幣と流通経済的貨幣とを連絡すべき機構によつて成立したものと考へるのであります。即ち財政的通貨とそれから流通経済的通貨と一つの制度として結び付けたものが流通貨幣であつたわけであります。即ち銀貨幣は当時の銀問題によつて解消してしまつた。さうして銀行券たる法幣が全貨幣の問題を吸収してしまつたわけであります。さうしてイギリスと蒋介石政権との合作による外貨資金の設定によつて、法幣の支拂準備として法幣一元＝英貨一先三による為替相場を略々決めまして、さうして國內通貨たる法幣を管理することになつたわけであります。流通経済的貨幣である所の都市にある法幣も、單に流通的ではない、経済的貨幣であるけれども、農村に流通する法幣も、性格の程度に差こそあれ、総て外國為替と均衡すべき關係に置かれ、さうして國內貨幣は外國為替について統制せられることになつたわけであります。法幣以前に於ても外國為替による統制は自ら無論受けてをったわけでありますけれども、幣制改革によつて初めて発行制度の上に形としてさういふものが出来上つたわ

けであります。又それ以前に於ける外國為替による統制は、銀為替であると共に、為替相場は金銀市価變動によつて変動し、その統制は統制といふよりも寧ろ攪乱の場合の方が多かったわけであります。要するに幣制改革以後の支那貨幣は正式による國內的國際的關係を通しての流通經濟的貨幣となつた。さうして政治財政的な貨幣といふよりも、他の諸國の戰爭經濟と同様に蔣政權と金融資本的な結合による發行銀行の法幣貸上げといふ形を執つて來たのであります。かういふ意味で、一九三五年の幣制改革で支那の貨幣は形式の上では全く本來的な貨幣となつたわけであります。

支那貨幣は以上のやうな政府系發行者と、これを受取る社会との縦の關係と、それに外から働きかける外國為替の横の關係によつて、その性格が今挙げたやうに段々變つて來たのであります。然しながらかういふ關係は支那貨幣にのみ実は見られるものでない。殊に戰爭經濟下に於ける各國貨幣は、程度の差こそあれ、同様の關係にある。即ち日本で申しますれば、軍需品を生産購入するために日本銀行が政府の發行する公債を引受け、現実に金は出て参りませんけれども、又筋道としてはその金が財政的貨幣として發行される。さうしてそれが結局、貨幣資本或は貨幣所得として實際の流通經濟の中を廻つて、その間に軍需品が買上げられるわけです。さうしてその金は今年は租税として上納され、或は貯蓄奨励、公債消化といふやうな形で日銀に納まつて行く。かういふ横の關係と縦の關係、言葉は悪いが、財政的貨幣と流通經濟的貨幣、かういふ面を持つてをるわけであります。それは何処の國の貨幣もさういふ形になつて

をりますが支那の場合も一九三五年の幣制改革以後はかういふ形になつたわけであります。唯、支那の場合には租税上納だけである。貯蓄増強、公債消化といふ面は欠けてをると思ふうであります。兎に角、形としては一応さういふことになつたわけであります。

今まで述べたことが銀行券とかメタリック・マネーとかいふことの區別をしないで、極く大雑把な概観をしたわけでありますが、これから銀行券の問題になるわけであります。

我々は以上のやうな基礎的な考察をした後、支那に於ける銀行券發行の問題を改めて考へて見る段階に入つたわけであります。

支那に於ける銀行券發行制度は御承知の通りに十九世紀の中葉に外國銀行が發行した。然しながらその数量も少くて、流通範圍も在留外國人と都市商民の僅かの間に流通してをるに過ぎなかつたわけであります。又一九〇四年、日露戰爭の頃設立せられました戸部銀行も銀行券を發行する。それから後、沢山の銀行が出来て参りますが、皆、銀行券を發行してをります。然しその發行數量は全体から見れば非常に少い。大体に於て、銀票、銀元、銅幣が支那の通貨の重要部分を占めてをつたのであります。その後、支那の正式銀行の設立が段々と続けられまして、銀行券發行がそれぞれ行はれて、何処の國でも初めに行はれてをります所の沢山の銀行で銘々勝手に銀行券を發行するといふやうな制度が、無論、支那でも實現したのであります。

かういふわけで、支那に於ける銀行券發行は、政府系發行の銀行券の場合は非常に少くて、所謂、民幣の發行数がずっと多いわけで

あります。外國銀行、支那銀行によって主として流通經濟的關係として發行される。これは取引の需要に基いて銀行券が發行されるといふ純粹に流通經濟的通貨として發行される。さうしてその流通は都市に於ける外國人、支那商人の間に初めは行はれ、農民は依然として支拂手段としての貨幣であるといふやうな伝統を執つてをります。それが、法幣制度が出来ましてからは、銀行券も先程申上げました支拂手段としての貨幣、他面、横の關係として流通貨幣的な貨幣として、支那貨幣としての本来の姿に戻ったのでありますが、以前の銀行券は主として狭い範圍に流通する流通經濟的貨幣として、財政的な意味を含まなかった。一般に支那銀行券の性格は他の硬貨と違って、横の關係のみである。流通經濟的關係を通じて發行せられ、さうして流通してをるものと概括的に見る事が出来る。

即ち支那銀行券については単に都市に於ける商業經濟的關係に於て觀察すればいいのであります。それは無論、外國より輸入せられたものではありますが、營利經濟の範圍に終始するために、支那商業社会に自然發生的であつたところの私票乃至手形と區別なく觀念せられて受理をせられ、管理せられたわけであります。形は外國から輸入したものでありますが、それを受取る場合には流通經濟的關係として前からある所の私票、或は個人的な手形と別に區別されないで流通する、さういふ形になったわけであります。それで、銀行券は商業社会の取引需要に応じて供給され、且つ流通し、セシヤ錢莊その他の旧式金融機関と新式銀行と、その機構の意味に別に變りはないわけであります。行政と關係のない支那經濟社会の取引需要に相應

するのみであつて、所謂、銀行主義理論の説明する通貨であつたわけであります。下の方から自ら盛り上つて、それを纏めるための通貨でなしに、實際取引、支那經濟流通を成り立たせるために自ら必要に迫られて流通されたまでの通貨であります。さうして支那社会が一般に法律的なシステムを形成してゐない。支那社会は統一的な社会になつてゐない。一つの國民經濟に無論なつていない。又支那社会或は支那人の考へ方といふやうなものが多元的であるといふやうな關係から、地方的、同業的或は緣故的団体に基礎を置く銀行によつて發行される。さういふ意味の多数銀行—唯、多数といふのが数が多いといふだけでなしに、同時に性質が違ふ、同郷団体、同業団体、或は緣故關係、さういふものが自分達で銀行を作つて、さうして資金を集めて、自分達の都合のいい所へ使ふといふやうな意味の發行制度であつた。多数といふのは單にナンバーを現はすのでなしに、多いといふのはさういふ意味が強いのであります。辛亥（西歷一九一一年）革命以後、外國銀行の勢力が段々と落ちて、支那銀行の地位といふものは段々向上して参ります。さうしてその銀行券の發行も段々増加して来ましたが、その性質は依然として個別主義的な傾向を備へていたのではないか、幣制改革は行はれ、さうして銀行券は形としては全支那の法幣として統一せられたのでありますが、それが受取られ、又流通する關係は今迄述べたやうな個別的な關係として、所謂個別主義的な性格に於て流通して来たのではないか。勿論通貨といふ形は、法幣はどこ迄も法幣で流通する訳でありますから、さういふ意味の統一は行はれた訳であります。しかしな

がらさういふ通貨が経済的な関係として流通する場合には、単なる通貨或ひは貨幣といふやうな形で考へるべきでなしに、それが貨幣資本或は貨幣所得として経済的な機能を果しつゝ、さういふ通貨が流通してをる訳であります。ですから支那銀行券が幣制改革で統一せられましたも、その統一は無論破れないで大体統一の方向に向つて来ましたが、それが具体的に経済的なファンクションをどういふ風に果して行くだろうといふことを考へる時には、やはり同郷的、同業的、縁故的といったやうな形容詞が附いてをるやうな性格を持つて具体的に流通してをるのであります。で、近代経済に於ける各國銀行券発行制度は一樣に自然発生的な多数銀行制度から統制可能を目標とする中央銀行制度へ移つて来るのが原則で、どこでもさういふ傾向を取つて来た訳であります。支那でもやはり同一の方向を取つたことを無論我々は是認し得るのであります。しかしながらかういふ形に於て漸次統一された法幣がその流通の実情に於ても統一されるためには、支那経済が一つの國民経済的流通経済を持つことを必要とするのではないか。即ち通貨の面で形式的に統一されてをる、ところがそれが動く場の経済、それが一つのシステムを持たなければ、結局先程申上げた形としての通貨は統一が行はれても——それは無論外れては困るけれども、それが具体的に経済上のファンクションを果すのにはむしろ個別的な関係と縁故的、同業的、同郷的、その他いろいろな関係で別の意味を持つて来てをるのではないか。若し貨幣の面に統一があつても、物の面が統一されない一つの國民経済的な流通経済を形成してゐるのではなければ、その統一は単

に同一貨幣が全國に行はれていふだけで、流通の実情に於ても統一ありとは我々はちよつと考へられない訳であります。形は統一された法幣であつても、その支那社会に於ける流通の実情は旧式貨幣に於けると同様である。物の経済その他貨幣化以外の経済部面に於て統一がない、所謂單一市場化が行はれない場合には、貨幣の実質的統一ありとはいつてもよろしうございますけれども、そこに問題が残つてをるのではないか。かういふやうな場合にも尚、形の上で貨幣統一は一國經濟機構の發展のためには政策的に無論必要ではありません。實際に物の経済、その他の貨幣以外の経済部面が不統一で困る、さういふ場合には貨幣の方を統一することによって他の経済部面を引っ張つて行くといふ政策的の効果があることは無論我々は承認する訳でありまして、それによつて國民経済的な機構の樹立を招来する、又生産流通部面に於ける發展をそれによつて招来する、さういふことは無論考へなければならぬことであります。しかしながら形式的政策的統一が貨幣流通の実情に甚だしく懸け距つてをる場合には、その政策によつて全國民的の統一の方に持つて行くためには非常な困難が出て来る。場合によつては弊害さへ出て来るのではないか。民國以来、支那銀行の分業は政府の方針として、これは形の上では独仏或は、日本のそれのやうな関係が比較されたわけですが、各種産業に対応して銀行を分業主義によつて整理しようと思つたわけでありまして。然しながらその結果はこれら分業銀行は分業的な特性を發揮することが出来なかつた。さうして何れも短期の資本を供給する所の商業銀行化してしまつた。その理由は

銀行分業がまだ支那経済の実情から切実に要求されなかったことにあるのであらう。日本の場合に於ても或る程度さういふことが考へられると思ふのであります。即ち支那経済に於ける生産と流通とは、前に申上げたやうに、農業生産と商業取引があるだけで、全体として商業経済の域に達しない。工業投資も貧弱であつて、農業についても固定的投資は無論行はれない。ですから、農業金融といつても、農業の固定的投資のための金融ではなくなるわけで、総て商業資本か、営利資本かであるために、貨幣資本の供給は唯、短期的に行はれるに過ぎないわけでありす。このことは、如何なる産業に照応する銀行も短期商業資本、経営資本を供給するに過ぎない、生産経済に照応する必要が割合に少い。単に営利経済のみに照応すれば事足りるといふことに理由があるのではないかと思ふのであります。こゝにいふわけで、形式としては全國統一せられた法幣も、流通の実情に於ては、尚その上に同業的、同郷的、縁故的といふやうな支那の主體的な立場に立つた経済への歪み、一般化への歪みといふやうなものがこゝに働いてをるのではないかと思ふわけでありす。

近代國民經濟に於ては、貨幣は一般的なものでありすけれども、その一般的となり得る所以は、財の個別的な性格に基く流れに照応しているからであります。物が流れる、それに対応して金も亦流れる。物と金とが対応する。こゝにいふことは無論、何処の國に於てもあり得ることではありますが、支那の場合にもさういふ対応関係は勿論なければなりませんけれども、その外に今申上げたやうな支那

社会の特殊な慣習といふか、特性といふか、さういふものゝために特別に歪みが多く来てをるのではないかと思ふのであります。そのために、支那の貨幣は形の上で統一されてをりましても、経済に於ける作用としての一般的性格を激しくすると破綻させてしまふ。こゝに我々が支那の通貨工作の上に反省して見なければならぬ問題があるのではないかと思ふのであります。こゝにいふやうな事態は、支那経済が國民經濟への発展の中途半途にあるためにさういふことになつてをるのであらうが、或は又、中途半途といふのではないに、支那の國民性が個別主義的な考へ方の上に立つてをる、さういふことからどんなに資本主義經濟、流通經濟的關係が發展しても、こゝにいふ性格だけは消そうとしても消えないのであるかどうか。その点は無論簡単に断定するわけには參らないのでありますけれども、兎に角、現在に於ては私が今申上げたやうな事情があるといふことは大体間違いないと思ひます。

支那經濟に於ける個別主義的なあり方は、貨幣制度の中でも、これを見ることが出来るわけでありす。他の國に於ては銀行券は硬貨或は準備金の上に載つて、さうして、その上に各種の信用形式が次々に拡大して、全体通貨の量を構成してをる。丁度ピラミットを逆さにしたやうな形になつてをる。下に正貨がありその上に銀行券、その上に預金通貨がある、こゝにいふやうな一ツの全体を構成してをる。さうしてその全体を構成する各種の通貨の間には無論統一の貨幣価値觀念がある。即ち一円札の一円も、小切手の一円も、五十銭札二枚の一円も皆一円である。その間には統一的貨幣価値觀念

がある。さうしてその間に有機的な関係が存在してをる。従つてその全通貨機構の中の一部に対して或る作用を与へた時には、それが全面的な関係に波及する。であるから、通貨統制をやる時に、或る一つの所を統制すると、それが何等かの形で全体に或る程度波及して行く。こういう形になってをるのであります。ところが支那に於ける各種の通貨は全体として今申上げたやうな構成を持つていない。各々他と無関係に独立してをる。さうしてその間の交換比率は地方的な取引需要を睨み合せた貨幣間の需給関係で動いて行くといふ程度である。であるから支那に於ては、例へば銀元に銅幣が加はる、それに銀行券が加はる。まだその他に滙割フイカクが加はるとかいつたやうなことで、その部分がこういう地位を占めて全体を構成するといふのでなしに、全体はむしろ後から決つて来て、一ツ一ツが加へられて行く。さういふ風に各種の貨幣は全体を構成してをる所の部分ではないやうに思ふ。

さうして又、銀行券、滙割フイカク、劃頭カクトウなどは各々独立に取引需要によつて要求される。銀行券に付ては法幣以後は無論別でありますけれども、しかし滙割フイカク、劃頭カクトウに付ては法幣成立以後に於ても強く、今申上げたやうなことが妥当するのではなからうかと思ふのであります。又、銀行券の領用発行制度リョウヨウキョウといふものがありますが、これも一遍にやつてしまつたら良ささうだと思はれるのに、あ、いふことが行はれて来たといふことは、銀行系統にピラミッド的な機構が出来ていないといふことの現れではないか、又、各銀行が本店と支店と別々に責任を持つてやる、或いは又、本店と支店が発行する銀行

券の責任も亦違ふといったやうなことも、さういふ風に見られる。さういふ訳で全体として銀行券或ひは銀行金融市場、総てに付て個別主義的な傾向が非常に見られる。

先程申上げたやうな貨幣、通貨といふやうなもの、個別的な性格といふものを考へる場合に、我々が日本で考へる以上に個別的な性格を支那の通貨に於ては考へなければならぬ。

先程いったやうに、同郷的、同業的、或ひは縁故的といったやうな意味からも、又別の個別的性質が加はつて来てをるのではないかと思ひます。勿論こういう個別主義的な傾向といふものは、支那經濟が國民經濟に統一されるといふためには、だんだん解消して行くものぢやないかと思ふのでありますが、しかしそれが一部分支那國民性に根ざしてをるならば、中々簡単には解消しないでせうし、それがどの程度、國民の考へ方によるものか、或ひは經濟發達の中途半途的な立場にあるためか、少くとも現在としてその両方の面があるといふことは想像されることであります。そこで今度は一方に於て法幣經濟はとにかく同一方向に向ひつゝある、とにかく形の方から引つ張つて行かうといふことであった訳であります、その制度自体が進んで来るともう一遍、逆な方向への力がかかり作用し始めるといふことになる。

以上述べたところは支那の貨幣の性格に付ての一ツの見方にすぎないかもしれない。さうしてそれは支那國民性の個別主義、複數主義的な傾向と、長年に亘る支那社会に於ける不安定性とから支那貨幣の状態を判断したのであります。さうして法幣成立以後に於て

は、銀行券に付て欠除してをりました支拂手段的貨幣の性格が再び復活し、同時に國際的並びに國內的な流通經濟的貨幣の性格が発券制度として制定せられたのであります。即ち貨幣の性格に於ける横の關係と縦の關係が法幣成立によつて初めて結合され、法幣の流通經濟的作用の面と、財政的支拂手段的作用の面とが有機的に結び付いた訳であります。かくして横と縦の關係が結び付いて初めて法幣が近代貨幣として誕生したのであります、少くとも全支那的な貨幣統一の端緒についたものといふことができます。

一般に戰爭經濟に於ける貨幣は、交戦各國とも租税納入と公債消化なる財政的貨幣の面と、それから戰時生産的流通の面を含む貨幣資本、貨幣所得としての流通經濟的貨幣の面と、この二つの面を持つて、その間の円滑なる有機的結合が要請され、又實現せられてるのであります。支那に於ける法幣制度の成立は、外貨乃至準備によつて横と縦との關係を結び付け、さうして近代貨幣たる緒についたものといふことができます。しかしながら既に述べたやうに支那經濟乃至支那社会の特殊性は、法幣制度の形式的な統一が實現したといふもの、まだ近代貨幣的機構の十分な發揮を妨げることが少くない。

海關採用の海關兩の実現は支那經濟がそれを実現し得る状態にあったことを立証するものでありますが、又支那國民經濟への統一が實質的に妨げられてをったのであります。これを擱へて國家的統一、政治的統一を企てたのが蔣介石である。又それを通して國民經濟的統一を助長しようとし、發展せしめようとしたものであります。

す。偶々支那事變となり、支那の國民的政治的統一は迫車が掛けられました。法幣の形式的統一はそれによつて近代貨幣たる實質をも著しく増強せしめたのであります。

この経過に於て法幣の成立は、それ以前の支那貨幣の場合に比べて画期的な事件であるといふことは確かである。

然しこの貨幣統一は實質的な方向へ事變によつて拍車せられたことは否み得ないのでありますけれども、同時にこれを妨げる勢力も又少からず動き初めて来たのであります。

即ち第三國物資の輸入の減退或ひは杜絶、戦火による生産の減退、その他によつて流通經濟の範圍は段々縮小して、さうして自立經濟に逆行し、農村に於ける生産方向も急速に自給自足になって来てをります。

この傾向は法幣の一般化を妨げ、法幣が形式的に統一せられて、その統一が維持されてをるにも拘らず、交換經濟範圍の縮小となり、その經濟的貨幣の同郷的、同業的、緣故的な個別化を強め、貨幣は段々と短期化して、その極限としては、つひに物々交換の増加を見てをるのではないかと思ふのであります。法幣による形式的統一は依然として變ることにはないのであります、その流通する面で個別的性格が強められる。その形式上へ現はれたもの、一ツとして匯割の如きものを考へなければならぬのではないか。即ち自分達でもつてやつて行こうといふのが、あっちこっちに出来た。

で、今述べましたところが支那貨幣の性格の一面を語り得てをりますから、我々が對支那通貨工作をこの面に照應せしめて見るこ

とも又必要でありましょう。事変勃発と共に北支に於ては、軍事通貨として鮮銀券を用ひ、続いて聯銀券を用ひましたが、いづれも銀行券ではあるが、その発行の過程に於ては、先に述べた縦の關係で、横の關係のそれではなかつたわけであります。聯銀券の發行に當つて所謂円元バー制度を執るその価値維持といふことは横の關係であります。即ち流通經濟的貨幣、なほ欲を言いますならば、価格と生産との自動的調節作用ある流通經濟貨幣にしたいのであります。が、兎に角、価値維持をするためには、北支—日本間に送金關係があるわけであります。杭州湾の上陸以来、中支の方に軍票が使はれてをりますが、これは徵發證券である。従つて縦の關係のみを持つてをることは無論である。これとても併しながら多少流通貨幣としての性質を持たなければならぬ。これに滿州國貨幣を加へて日滿支經濟一体化乃至円ブロックを形成せしめようと試みられたのであります。聯銀券及び軍票に付て横の關係に於ける貨幣たらしめ、流通經濟的貨幣たらしめるために、さうして又日滿支間に於ける物貨の連鎖を円ブロックの名に恥じざるやうに成立せしめるために非常な努力が払はねばならないのであります。一九三五年以来横と縦とを有機的に連絡した法幣によつて成立した法幣物価といふものは、法幣の外貨転換性の縮小とともに騰貴して來た。一面、円系通貨が消費通貨であつて、法幣物資に依らざるを得ないといふ建前から、又他面、支那人が必らずしも合理的にその金で取引しないといふやうなことに由りまして、軍票物価、聯銀券物価がだんだんと法幣の影響を受けて騰貴して來た。本来、同一物価水準であるべき

物価が、バラバラとなり、極端なさういふ制限或は貿易調整によつて円ブロック間の流通を維持してをるのであります。儲備券の發行に付てもその發行過程は全く財政的關係であり、縦の關係としてであります。これら円系通貨が縦の關係として發行せられたが、如何なる程度に横の關係を成立せしめるかといふことが問題の焦点であります。希望的觀測を排して正しく認識しなければならぬのであります。

円系通貨の流通經濟的貨幣としての性格は、結論を先に申上げると、流通經濟的貨幣としては甚だしく微弱であると思はなければならぬのであります。その理由として考へられるのは、およそ、次のやうなことでありましょう。

円系通貨は軍の物動物資の購入のために發行せられ、それがその社会に於て残留して流通する。これが流通經濟的貨幣の第一歩であります。歩留りができるといふことが、流通經濟的貨幣になつたかならないかといふことの最初の問題であります。現地日本人社会に於ては簡単であります。それが問題として採り上げられなければならぬのは支那人社会に於てであります。

惟^{おも}ふに支那人間に於ては円系通貨が多少の色眼鏡で見られてをることはあるかもしれません。しかしそれに対する信頼感が十分でありましたならば、流通上左程差支へないのではなからうか。安定した購買力が保証される限り、自己の生産と繁榮とのみ願ふ彼等にとつて、円系通貨と雖も喜んで受理されるのであります。然しながら各種の円系通貨は占領地の支那人に対して果して十分な安心を与

へてをるだらうか。円系通貨が流通経済的貨幣としての安定感をどういふ風にしたら彼等に与えられるであらうか。

第一は我國が戦争に勝利を得るか否かといふことであつて、それに対して彼等がどんな見透しを持つてをるかといふことが直ちに円系通貨が流通経済的貨幣にどの程度になり得るかといふことに現われて来る。

第二には円系通貨がその流通過程に於て各種の職能を如何なる程度に果してをるか、円系通貨が流通経済的貨幣となるといふことは、それが所謂円域を構成して独立の経済圏を形作ることであります。このためには占領地区、和平地区の都市と農村とが一定の割合を以て構成せられてをることを必要と致します。この場合、都市は農村の生産物に依存し、農村は都市より供給される文化物資と自己生産とに依るのであります。勿論この場合に於て第三國物資に依ることはありますが、然しながら或程度独立した円域といふものを持つていないと、流通経済的貨幣たるために非常な困難が出て来るのではないか——或程度の経済的独立性をその地域が持つていないと困るのであります。然しながら、こういうやうな条件は実際を見ると、実際とは全く違う訳であります。占領和平地区の現実的な構成は、よくいはれるやうに点と線である。或ひは点にすぎない。然しながらどうしても、例へば中支の儲備券が流通経済的な貨幣になるためには、その円域といふものを或る程度構成していなければならぬ——即ち消費地通貨だけでなく、生産地通貨たる意味を一緒に持つていないと誰がやってみても旨く行くものではない。やり方が

うまいまづいといふことではなしに、元々不可能のことをやらうといふことになってゐるのではないか。従つて現実に、和平地区に於て円域を形成し、円系通貨を流通経済的貨幣たらしめるための充たされざる条件を何か別の方法によつて充たさなければならぬ。日本から持つて行く物があまりいとなれば愈々困る訳であります、それでも尚、徴発證券といふやうな役目を果させるためには、それが流通経済的關係としての貨幣である性格を少しでも持つていないと、徴発證券たる役目は果し得ない。この条件充足の方法として行はれるものは無論決して少くないのであります。第一は裏付け物資の持込みであります。第二は我が方の物資需要のために、円域以外の敵地からの購入であります。これも行はれてをるのであります。第三國よりの輸入もあるけれども、これは今日は遂に遮断されてをります。主として今日は奥地農村からの物資の購入によらなければならぬ。どうしても円域以外の奥地によらなければ儲備券といふものが流通経済貨幣にならない。斯く敵地区物資に俟つ程度が強ければ強い程、円系通貨は法幣に依存してをるのであります。

日本及び第三國物資の輸入が減退し、和平地区以外の奥地物資によるが多ければ、それは円系通貨の流通経済的貨幣としての性格が法幣乃至法幣経済に依存してをる所以なのであります。即ち円系通貨が法幣にデペンドして流通し、円系物資は法幣物資によつて支へられてをるのであります。換言すれば、円ブロックに於ける日満支物価の連鎖は、その根本に於て日本経済によつて支へられてをりますが、その末端は法幣経済によつて支へられてをるのであります。

す。而も日本の供給力の不足は法幣経済への依存を十分ならしめることが要求されるに至らしめるものがあるであらう。

この意味に於て華興券及び儲備券を法幣に対してパーリンクしたのは、こういう理由があるのではなからうか、実際に於てはどういふやうにされたか、私は知らないのですが、私達が考へるとこういう意味に考へるのであります。ですから、パーリンクといふことを通して、法幣経済、法幣物資によるといふことが我々の今申上げたやうな所から出て来る。

斯く円系通貨が、その貨幣としての流通経済的機能を尽し、円域経済圏を維持せんがためには、好むと好まざるとに拘らず法幣経済に喰入り、法幣経済を利用しなければならぬのではないか。我が方の施策もこの線に沿って法幣地域に対して買出し、収買をやつてをるわけであります。要するに支那の通貨といふものをこういう風に見て参りますと、今申上げたやうな性格が必ずしも合つてをるとは考へませんが、若しこの性格を一応許すと致しまして、一体我々は何を考へるかといふ問題になる訳であります。で、一般的な形にしまして、銀行券の発行制度といふものが私に与へられた問題であります。銀行券発行制度の問題については、一般的価値形態としての通貨、さういふ面だけで考へたのでは足りないのではないか——即ちその分母の上に分子として戴つてをる貨幣資本、貨幣所得といふやうな別の名前を持った通貨、それがどう動くかといふことに関わらしめて銀行券発行制度の問題を考へることが必要ではないか——こういうのであります。一九世紀前半の例の銀行主義理論といふの

は、元々取引の需要に基いて通貨が供給される——全く経済の磁場によつて取引が行はれ、生産が行はれ、その取引に関連して通貨が供給されてをるプロセスを取扱つて、それに基いて銀行券を発行するといふのであつた訳であります。だから多数銀行に銘々勝手に発行させて置けば、要らなくなればその銀行券が淘汰されるといふやうな非常に自由主義的なやり方であります。

それに対して、リカルドはじめ通貨主義論者といふのは、それを纏めるある通貨が雑多に流通してをるのを全体としてどう纏めるかといふ立場に立つて、即ち、統制しよう。管理しよう。枠を嵌めようといふ立場で管理通貨主義というものが出て来た訳であります。実はあの考へ方に付きましても、イギリスの経済学の考へ方は、丁度先程支那に付いて申上げたやうに非常に個別的であります。個別主義で全体としてのシステムが構成せられていない。それを何故通貨に付てだけはあ、いふ統一的な厄介なものを使用したかと申しますれば、通貨主義理論、即ち國際金本位制といふものが、自由貿易理論と表裏の關係にある。当時の方向としては自由貿易は動かし得ない方向であつたのであります。それにマッチさせるためにはどうしても國際的金本位制による通貨主流理論でなければならぬ。通貨主義は制限的な理論で、当時の自由主義的な行き方から逆行する訳であります。自由貿易の裏側にくつついてをるといふやうな訳では認めせられた訳です。さういふ風に全体を纏める、國の中を纏める、纏まつた國と他の國と比較して行くといふやうな立前で、纏め役として考へられたのであります。で、どこの國の銀行券発行のシ

システムも、何時でも多数銀行券発行制から中央銀行制度に移って来てを。これは経済が國民経済的統一といふ方向に向って行くために必要である訳であります。銀行券発行制度の問題とすると直ぐにその通貨主義理論のやうな考へ方から、一般的な統一的な建前の方向にだけどうも行き易いのではないか。この通貨主義理論に対して反対したところの銀行主義理論といふものは、単に通貨数量を問題としたのでなしに、その発行された通貨がどういふ経路で、どういふ人達によつて発行され、どういふ人達によつて授受され、さう

してそれが結局還流して始末がつくかといふやうな問題を考へるのであります。それがもう一遍銀券発行制度として少くとも支那問題を考へる場合には必要なのではないかといふやうなことを感じまして、殊に支那の通貨統一といふやうなことも、事實は知りませんが、噂に聞いてをりますので、さういふことをやると形式だけは纏まっても混乱が起るのではないか、さういふ感じを持ちますので、さういふ見方を以て問題を見てはまづいのではないかといふやうなことを実は申上げたのであります。